

アゴタ・クリストフの三部作 ——家族をめぐる考察——

高橋 奈月

[キーワード：①アゴタ・クリストフ ②三部作 ③家族]

はじめに

ハンガリー出身のフランス語作家、Agota Kristof（アゴタ・クリストフ、1935–2011）の三部作¹⁾は、現在37ヶ国語に翻訳され世界的に読者を獲得している。*Le Grand Cahier*（『悪童日記』、1986）、*La Preuve*（『ふたりの証拠』、1988）、*Le Troisième Mensonge*（『第三の嘘』、1991）の三作から構成される、双子の年代記である。

ハンガリーの小村に生まれたクリストフは、9歳の時家族と共に国境近くの町 Kőszeg（ケーセグ）に移り住む。1956年、クリストフ21歳の時、ハンガリー動乱を逃れてオーストリアに亡命し、その後スイスの Neuchâtel（ヌーシャテル）に移住してフランス語を学び始める。地元ラジオや劇場で劇作家としていくつかの作品を上演していたクリストフは、51歳の時、初めての長編小説『悪童日記』を発表する。これに端を発する三部作を発表した後、短編集 *Hier*（『昨日』、1955）や、自伝的小説 *L'Analphabète : récit autobiographique*（『文盲—アゴタ・クリストフ自伝』、2004）などを残し、2011年に他界する。

三部作は、戦火の下で過ごした子供時代、亡命による離別、その後の異国での生活など、作者の半生が色濃く反映された作品である。しかし

同時に、これは「家族」をめぐる物語でもある。戦争や亡命は、年号や固有名詞を省くことで極限まで抽象化され、その一方で、主人公である双子は母や祖母、父や祖父については、極めて緻密に描写している。双子の視線は常に「家族」に注がれ、『第三の嘘』では夢の中でも離別した家族との邂逅が繰り返される。我々はその視線を追いながら、三部作に通底する「家族」のテーマについて考察を試みたい。

本稿では、三部作うち『悪童日記』と『ふたりの証拠』について論じることとする。一作目と二作目は同一の時間軸上で展開し、双子の少年時代から青年期、そして壮年期に至るまでが語られる。だが『第三の嘘』になるとそれまでの物語は白紙にされ、前二作とは全く違う双子の人生が語り直される。そこで、三部作全体を論じるに先立って、まずは最初の二作品を考察する。

I 『悪童日記』における家族像

『悪童日記』は、戦禍を逃れて国境近くの町に暮らす祖母の家に疎開した双子の子供の視点から、一人称複数 *nous* (ぼくら) を用いて語られる物語である。母親と祖母の間に確執があったこともあり、祖母は双子に辛くあたる。祖母自身も町全体から *la Sorcière* (「魔女」) と呼ばれ忌み嫌われていたために、町の人々も双子を罵る。大人の庇護を受けられない過酷な状況の中で、双子がより狡猾に、より残酷に自らを訓練して生き抜いていく様子が、双子の手による作文の形式で淡々と描かれている。

では、主要な登場人物であるところの彼らの母親 *Notre Mère* (おかあさん) と祖母である *Grand-Mère* (おばあちゃん) がどんな人物なのか分析しよう。

1. ふたつの母親像

『悪童日記』は、双子による作文という体裁で書き進められる。自主的な学習の一環として書き始められた作文は、疎開後の新しい生活を克明に記録している。この「日記」を書くにあたり、双子はひとつのルールを定めた。それは、書かれた内容が事実でなければならないということだ²⁾。例えば「好きだ」という感情や「美しい」というような感想は書いてはいけない。見たことや聞いたことをあるがままに描写するのだ。

しかし、家族像の描写に着目すると、ルールを遵守した上でもなお、描写は双子の主観を反映してデフォルメされていることが分かってくる。そして、その中心に居るのは彼らの母親なのである。

優しい「おかあさん」、あるいはデフォルメされた母親像

『悪童日記』の双子にとって、母親は「おばあちゃん」に次いでよく描かれる人物だ。だが、実際に「おかあさん」が登場するのは62章中2章だけで、他の部分は全て双子の回想である。彼女はどんな人物だったのか、まずは回想に焦点を絞って検討してみよう。

回想で初めて「おかあさん」が登場するのは、「*La saleté*」（「不潔さ」）の章である。始まって6番目のこの章で、双子は「おばあちゃん」との新しい生活、つまり、風呂にも入れず、髪も切らず、服は破れたまま繕われず、爪の生えっぱなしの生活を描写するにあたって、その前置きとして、風呂に入れてくれ、床屋に連れて行ってくれ、清潔な服を着せ、爪を切ってくれた「おかあさん」との生活を紹介している。

だが、双子はこの時すでに9歳になっており、健康な体に生まれ、橋を作ったり魚を獲る仕掛けを作るほどの器用さと自主性を持ち、大人に気味悪がられるほどの聡明さを備えている。母親がわざわざ彼らを風呂に入れてやる必要があるだろうか？ 司祭館の女中の配慮で風呂を借りた時、それが母親の手から離れて最初の入浴であったにもかかわらず、双子は誰にも手伝われずに垢まみれだった自分たちを「天使のよう」

(GC, 80) とされるまでに清潔に磨き上げることができた。「おかあさん」の回想と司祭館での入浴の様子は、双子は既に誰の補助もなく完璧に入浴することができたこと、それにもかかわらず「おかあさん」は双子の手助けをしていたことを示している。

« Exercice d'endurcissement de l'esprit » (「精神鍛錬」) では、「おかあさん」の言葉を尽くした愛情表現が、疎開先の生活で「おばあちゃん」や町の住民から浴びせられる罵倒と対比させる形で描かれている。

おばあちゃんはほくらに言う。

「牝犬の子！」

人々もまた、ほくらに言う。

「魔女の子！売女の子！」

(中略)

おかあさんは、ほくらに言ったものだ。

「いとしい子！私の宝物！私の喜び！私の大事なちっちゃい赤ちゃん！」 (GC, 27)

ここから、人々の罵詈雑言もさることながら、「おかあさん」の愛情表現もまた極端なものであったことが伺える。この二つの場面から、双子は「おかあさん」から過剰なまでの保護と愛情表現を受けていたと言える。また、「おかあさん」の回想が過酷な現実と対比させる形で登場していることも、彼女の優しさを際立たせている。

« L'école » (「学校」) の章では、父親が双子の二人で一つの人格を形成する異常な性格を矯正しようと、学校で双子を別々のクラスに入れるべきだと主張をする。それに対して「おかあさん」は双子の特殊さを理解し、肯定して、双子を引き離してはいけないと主張している。彼女は双子の特異性を深く理解し、父親や世間常識といったものから双子を守ってくれる守護者として描かれている。

一方、全体を通して「おかあさん」の負の思い出は一切描かれていない。9年間母親の元で育ってきて、叱責や親の不理解など負の思い出が存在しないなどということがあろうか。それが一切描かれていないということは、そんな出来事がなかったことを示すのではなく、描くことを避けられていると考えるのが妥当である。これらの点から、「おかあさん」はひたすらに優しく母性愛に満ちた守護者として美化されていることが分かる。

吝嗇な「おばあちゃん」、あるいはもう一つの母親像

一方「おばあちゃん」の人柄はというと、実の娘を牝犬呼ばわりし³⁾、実の孫を日常的に *fils de cheinne* (牝犬の子) と呼び、母親が彼らに持たせた衣服を取り上げて売り払い、双子のための養育費を着服した上、仕事をしなければ双子を家にも入れず食事も与えないといった人物である。

これもまた、事実の中から彼女の悪魔的な挿話を抜き出すことでデフォルメされているのではないだろうか。「おかあさん」と「おばあちゃん」の描かれ方には、善と悪とでも言うべき明確な対立構造が存在する。「おかあさん」は清潔で、「おばあちゃん」は不潔だ。「おかあさん」は優しく、「おばあちゃん」は意地悪だ。「おかあさん」は離れても手紙と送金で愛情を示してくれ、「おばあちゃん」はその手紙と仕送りを差し止めてしまう、といった具合である。

だが、「おばあちゃん」にはもう一つの顔、すなわち母性的な一面も見られる。「おかあさん」とは別の方法で双子の生命を補助している側面があるのだ。彼女は都会育ちの双子に、町で生きて行くための知恵を教える。忠告は愛情からではなく、単に双子の労働力を活用するためのものかもしれない。しかし「おばあちゃん」の心情はともかく、戦争という有無を言わせぬ情勢下において、子供たちが生きて行くのに必要なのは最早お金と愛情ではなく、危機管理能力であり、食べ物を得る技術

であることは確かだった。

我々は、双子を支える存在が母親から祖母に移行する様子をはっきりと見る事ができる。最初の冬、双子は「おかあさん」から送られてくるお金と洋服でようやく飢えと寒さをしのぐことができた。この時確かに双子は「おかあさん」に助けられている。だが戦争が終わる数日前、「おかあさん」は双子を迎えに来たところを爆撃に遭い死亡する。彼女の死と入れ替わるように戦争が終わり、外国の軍人が町を占拠すると、お金は役に立たなくなり、「おばあちゃん」から学んだ外国語、菜園、森の歩き方、狡猾さなどがはっきりと双子を支え始めるのである。

残酷な「おばあちゃん」との暮らしと劣悪な環境に順応して行く双子の逞しさは、戦時中にまで頑なに双子を無垢な子供にしておこうとする「おかあさん」の愛情の盲目さを露呈させ、一見残酷で非情な「おばあちゃん」を原始的な母親像として再認識させる。

2. 記憶の中の「おかあさん」と現実の「おかあさん」

上述の母親についての分析で、母親が思い出の中で優しい人物としてのみ描写され、「おばあちゃん」と対比させることもまた母親の優しさを際立たせていることが明らかになった。では、実際の「おかあさん」は双子が描く通りに母性的な守護者だろうか？ 物語の冒頭と終盤に登場する現実の「おかあさん」について分析し、確認する。

« L'arrivée chez Grand-Mère » (「おばあちゃんの家への到着」)

まず、冒頭の「おばあちゃんの家への到着」で、「おかあさん」は双子を「おばあちゃん」に預ける。双子のために、長い間確執があり音信不通だった自分の母親に頭を下げて息子たちの保護を頼んでいる「おかあさん」の様子からは、身を呈して双子を守り抜こうという意思が見て取れる。ところが必死の「おかあさん」に対して、「おばあちゃん」は無情な言葉を投げかける。「おまえだって子供たちを、知らない人の所

へ、どこでもいいからやっしまえばいいじゃないか」(GC, 10)。一見冷酷なこの意見は、しかし、この上なく的確でもあるのである。

「おかあさん」自身、「おばあちゃん」とは10年間連絡を取らず、結婚と出産の報告さえしなかったほどの確執を抱えている。しかもその原因は、「おばあちゃん」による「おじいちゃん」の毒殺疑惑だ。「おかあさん」は「おじいちゃん」が大好きで、彼のファーストネームをそのまま双子に名付けている。つまり「おかあさん」のしたことは、殺すほど憎んでいた「おじいちゃん」の血と名前を受け継いだ小さな子供を「おばあちゃん」の前に放り出すということだったのだ。これは紛れもなく、戦争とは別の危険に双子を晒すことを意味する。危険の種を増やすくらいなら、「おばあちゃん」の言う通り知らない人の所へ預けたほうがまだ良いのではないか。

その後、「おばあちゃん」は「おかあさん」が送ってくるお金を着服し、衣服を売り払い、手紙を焼き捨てた。重要なのは、少し考えれば「おかあさん」にもこの事態は容易に想像できたということだ。作中では「おばあちゃん」の双子への仕打ちばかりが目を引くが、双子をこの「おばあちゃん」の家に預けたのが、彼女の残忍さを熟知しているはずの「おかあさん」であることを忘れてはいけない。この母親は、自分ですら関わりたくない人物の家に双子を預けた。危険性も考えず、困った時だけ都合よく実家を頼る態度は、「おかあさん」の軽薄な側面を露呈させていると言えよう。

« Notre Mère » (「ぼくらのおかあさん」)

「おかあさん」の二度目の登場は物語の終盤、彼女が外国人将校のジープに乗り、胸に赤ん坊を抱いて双子を迎えに来た時である。双子はあれだけ思い出の中に求めていた母親が現れたというのに、彼女についていくどころか「おばあちゃん」の家に残留することを主張する。

東浦弘樹氏は、「母は死すべし、父は死すべし——アゴタ・クリスト

フの『悪童日記』の中で、双子が母親に同行しなかったのは母親に新しい子供が居たことが原因ではないか、と述べている⁴⁾。しかし、『悪童日記』の中に見える双子の人物像は、そうは語っていない。双子はそもそも、「おばあちゃん」や隣人を見捨てて国境を超えることができる人物ではないのだ。

その根拠としてふたつのエピソードが挙げられる。一つは、「おばあちゃん」が気絶した一件である。連行されて行く人々の一群が町を横切った時、「おばあちゃん」はエプロン一杯の林檎を零した。沢山の林檎が転がり、いくつかは飢えと渇きに苦しむ彼らの手に届いた。その行為に怒った兵士が、彼女を昏倒させたのである。駆けつけた双子は事情を聞くと「おばあちゃん」をベッドに運び、手を握りしめ呼吸を見守り、長い間枕元を離れなかった。この時、ずっと元気だった「おばあちゃん」にも体力にも限界があること、それは避けがたく訪れるものなのだという事を双子は身に沁みて感じたはずだ。また、双子は隣に暮らす乞食の少女 *Bec-de-Lièvre* (兎っ子) とその母親を死の淵から助けたこともある。ある日、双子は兎っ子母娘が餓死寸前まで追い詰められているところを発見する。冬と戦争の貧しさの所為で、誰も彼女らに施しをしなくなったのだ。町の司祭の所まで行って危機を報せるも相手にされず、双子は司祭を恐喝してお金を手に入れ、冬の間ずっと母娘の面倒を見るのである。この一件で、兎っ子母娘には生命の危機を目前にしても助けてくれる人もなく、生きるのに最低限のものを調達する術もないのだと判明した。もし双子がいなければ既に死んでいてもおかしくないのだ。

これらふたつの出来事は、双子が「おばあちゃん」と兎っ子母娘にとっての生命線なのということ、双子が彼らを見殺しにできない性格であることを明らかにしている。今までの出来事から鑑みて、双子が自分たちを絶対に必要とするこの三人の女性を放棄して「おかあさん」の元へ帰ることは考えられないのだ。一方「おかあさん」には愛情を注ぐ

べき新しい子供もいるし、力のある大人の男もついている。双子の手は必ずしも必要ではない。よって、双子が「おかあさん」についていくことを拒否したのは、彼女が新しい家族を連れていたことに対する拒絶が原因ではなく、あらかじめ決まっていたことだと言える。

問題となるのは、双子が「おかあさん」を拒否したことでなく、それに対する彼女の対応である。

以下が「おかあさん」が双子と再会して最初の会話である。

「来なさい！早くジープに乗りなさい！行きますよ。早くしなさい。何も持たないでいいから、来なさい！」

ほくらは問う。

「誰の子なの、その赤ちゃん？」

彼女が言う。

「あなたたちの妹よ。いらっしゃい！ぐずぐずしてる時間はないのよ」
ほくらが問う。

「どこへ行くの？」

「他の国へよ。質問なんかやめて、来てちょうだい！」(GC, 136)

「おかあさん」は登場するなり、再会を喜びもせずヒステリックに命令し始める。回想の中では双子を「私のちっちゃなかわいい赤ちゃん！」と呼んで可愛がっていたあの「おかあさん」が、有無を言わず彼らをジープに積み込もうとするのである。ここに、記憶の中の「おかあさん」との食い違いが生じる。彼女はいつも双子の側に居て、優しい言葉を並べ、過保護なまでに世話してくれる「ほくらのおかあさん」だった。しかし今は、ジープが象徴する新しい家族の枠組みの中に双子を無理やり押し込もうとしているのだ。

更に、双子が同行を拒否すると、「おかあさんが将校に、ほくらを力づくで連れて行くよう頼む」(GC, 137)。双子の意見を理解しようとも

せず、力まかせに連れ去ろうとする暴挙に出るのである。双子が将校を振り切って屋根裏部屋に隠れると、「おかあさんの命令よ、さっさと降りて来なさい！」(GC, 137) と命じる。双子が今の生活を続けたい旨を述べると、「私の子供たちよ、手元に欲しいわ！」(GC, 137) と所有権を主張し始める。双子が説得に応じず取り乱した「おかあさん」は、ついに将校の制止を振り切って赤ん坊を抱いたまま双子の方に駆け寄り、その直後爆撃に遭って死んでしまう。一連の様子から、我々は「おかあさん」が双子をほとんどモノのように扱っている印象を持たざるを得ない。実際の「おかあさん」は、我々が双子の回想の中に見出して来た優しく理解ある人物とは別の様相を呈しているのだ。

3. 「おかあさん」の死と永遠の母親

以上のことから、回想の中の「おかあさん」と現実の「おかあさん」の乖離は、双子の拒絶の原因ではないことが分かる。しかし、彼女の死がもたらす意味には多大な影響を及ぼしたと考えられる。「おかあさん」は、将校の制止を振り切って双子に駆け寄ろうとする。この瞬間、双子は「おかあさん」の所有権を将校から取り戻したと言えよう。そして次の瞬間、彼女は爆撃に遭って死ぬ。これによって双子は紛れもなく母親を失ったが、それと引き換えに双子は永遠の「おかあさん」を手に入れたとも言えるのだ。

「おかあさん」の再来で、双子は記憶と現実の齟齬を学んだ。記憶の中の「おかあさん」は優しく愛情に満ちた要素のみで構成された理想的な母親であり、現実の母親は身勝手にヒステリックな面を持つ不完全な存在だった。そして記憶の中の「おかあさん」の理想像は、他ならぬ母親本人の登場によって破壊されることを運命づけられていることも明らかになった。彼女が生きている限り、記憶の中の優しい「おかあさん」が本人の登場によって破壊されることは何度でも起こり得る。ところが彼女が死ぬことによって、「ほくらのおかあさん」は二度と穢されるこ

とのない完璧なものとなって記憶の中に閉じ込められる。離別の苦しみ
が、引き換えに永遠をもたらしてくれたのだ。

双子は後に「おかあさん」とその赤ん坊の骨を取り出し、ニスで加工
して屋根裏部屋に吊るした。歳を取ることもない赤子と変わることのない
母親の構図は聖母子像を連想させる。奇しくもタイトルは « Notre
Mère » (「ぼくらのおかあさん」) であり、像や絵画の中で永遠の母親を
象徴している聖母マリアその人を暗示する。記憶と現実の間にある齟齬
を埋める方法を、双子は死に見出した。もう写真と骨格にしか面影を見
出せなくなった「おかあさん」は、記憶の中で永遠に美化され続ける。
唯一その理想化された姿を穢せる「おかあさん」は、もういないのだ。

その後、「おばあちゃん」が死に、次に「おとうさん」が訪ねて来て
国境を渡り亡命したいのだと双子に相談する。双子は最後の家族である
「おとうさん」を国境の地雷原に送り出し、地雷を踏んで爆死した父親
の体を踏み越えて双子のうち的一方が国境を渡る。一度は母親自身に
よって破壊された母親像が、彼女の死によって永遠に釘付けにされたこ
とが、双子を離散へ促したのではないだろうか。血縁者をすべて失い、
一心同体の兄弟さえも遠ざけることで、彼らは絶対に裏切られること
のない永遠の家族を手に入れることを試みたのではないか。

Ⅱ 『ふたりの証拠』における家族像

『ふたりの証拠』は、『悪童日記』の最後の場面で国境を越えなかった
方の双子に Lucas (リュカ) という名が与えられ、彼の視点から綴られ
た8章立ての手記である。本作では、リュカには兄弟などいないと周囲
が証言しており、国境を越えていった兄弟の存在はリュカの妄想だとい
うことになっている。

リュカは15歳だ。父親の死以来意識の混濁と嘔吐を繰り返していたが、
少女や司祭と関わり徐々に調子を取り戻して行く。ある時、父親との子

を身籠って家を追い出された若き母親 Yasmine (ヤスミーヌ) と、その妊娠を隠すためにコルセットでしめ上げられ奇形児として生まれた赤ん坊 Mathias (マティアス) に出会い、彼らと共に暮らし始める。リュカはマティアスを自分の息子のように可愛がり世話するが、ヤスミーヌにはほとんど関心を示さず、ついに殺してしまう。母親は自分を置いて都会に行ったのだと聞かされたマティアスは、母親に捨てられたことに傷つき、家族を失った孤独に追い詰められて7歳の若さで自殺する。8章のみ、リュカの妄想だと言われていた兄弟 Claus (クラウス) が30年後に帰国して書き足したものとされている。血縁者を失うところから始まる物語で、家族がどのように描かれるか分析する。

1. 再構成される家族

『悪童日記』と『ふたりの証拠』を隔てるのは家族の死である。父親の死をもって家族を完全に失ったリュカは、父親の死体を確認して以降正気を失う。家族の喪失が彼の精神を狂わせたのだ。

その精神異常からリュカを引き戻したのはひとりの少女だ。リュカは少女に妹を重ねることで気力を取り戻し、それ以来人々に失った家族の面影を見出そうとしているように見える。家族関係の全てを失ったリュカは、それを補うために別れてしまった家族たちを赤の他人で補填して、家族を再び獲得しようとしているのだ。リュカが他人の中にどのように家族を見出して行ったか、分析しよう。

アニェス、妹

初めに登場する疑似家族はもうすぐ6歳になる少女、Agnès (アニェス) だ。彼女は司祭館の女中である老婆がリュカを呼ぶために寄越した姪である。彼女はリュカにとって見ず知らずの他人だったが、母親と一緒に死んだリュカの妹がもし生きていたら、同じくらいの年齢だった。その少女にリュカは言う。

「君みたいな妹がいたらいいのにな」

「妹いないの？」

「いない。もしいたら、ブランコを作ってあげるのに。きみはぼくにブランコ作って欲しいかい？」(LP, 16)

この会話は、リュカが妹の存在を彼女に求め、家族の代替として機能することを欲していることを予感させる。そしてアニエスの出現が、父親の死以来陥っていた錯乱した生活からリュカを立ち直らせる大きな転機となるのである。

神父さん、あるいはおとうさん

アニエスに促されて、リュカは司祭館に赴く。この時から、リュカは『悪童日記』で *Monsieur le curé* (司祭さん) と呼んでいた人物を唐突に *mon père* (神父さん) と呼び始める。言うまでもなく、*mon père* という語には「ぼくのお父さん」という意味もある。実父の死と入れ替わりに司祭の呼び名が変わったことは偶然ではあるまい。呼び方だけでなく、ふたりの関係性も変化している。『悪童日記』では、双子と司祭の関係は兎っ子のための生活費の受け渡しの他、司祭が偶に本を貸したり一方的に説教をする程度の関係だった。それに対して『ふたりの証拠』では司祭は老衰して貧しく、食事をリュカに依存しており、リュカのほうは、精神的に司祭に依存している。

リュカは父親が地雷原で爆死した時から、嘔吐を繰り返していた。しかし、司祭館を訪れて司祭と一緒に食事した時には嘔吐せず、これ以降生活が正常に戻り始める。リュカは *mon père* (神父さん) に失った *mon père* (おとうさん) の姿を見つけたことで安定を見出したのだ。

リュカにとって司祭が特別な存在だというのは以下の行動からも分かる。リュカは司祭が遠慮するにもかかわらず、鶏やチーズなど、必要以上に豪華な食事を無償で提供するのだ。これはリュカがそれだけ特別な

価値を司祭との関係に見出しているということ、つまり、リュカが司祭に父親を求めていることを裏付けている。

愛人クララ、あるいはおかあさん

リュカは町外れにある図書館の職員であるクララと出会い、愛人関係になる。リュカはクララに甲斐甲斐しく話しかけて関係を築き、「あなたは母に似ています (LP, 55)」と言って親しくなる。クララもまた「わたし、あなたのお母さんでもほとんどおかしくない年代だわ。(LP, 63)」と述べており、彼らの愛人関係の背後に母子関係を感じさせる。しかしクララは、かつて政府によって謀殺された夫 Thomas (トマ) のことだけを思っており、トマがどれだけ愛しく優しくかったかということ、それがいかにして永遠に失われたかということばかり繰り返し語る。リュカは愛人に胸に巣食う過去の亡霊に嫉妬するわけでもなく、愛人がかつての夫の話をするのに親身に耳を傾ける。そして自分も、生き別れた兄弟クラウスのことを彼女に語り始める。リュカにとって、クララは愛人であり、母親であると同時に、家族の不在の痛みを共有できる唯一の存在でもあったのだ。

クラウスへの妄執

ところで、『ふたりの証拠』においてリュカの兄弟が実在しないとすると、その妄想はいつどのようにして形成されたのだろうか。

『ふたりの証拠』は8章で構成されているが、リュカの言う通り兄弟が実在して国境を越えて行ったのなら、1章でリュカはかけがえのない兄弟とも離別しているはずだ。ところが、1章と2章では失ったばかりの兄弟について何も描写されていない。家族がどのように失われたかを淡々と羅列していく場面があるが、父母、祖父母、妹の消息については説明され、国境での父親の死についても言及されるのに、その父親を踏み越えて行ったはずの兄弟については何も述べられていないのだ。

リュカが初めて兄弟の存在を口にするのは、3章でクララに出会ってからである。トマの話をするクララに、リュカはぼつりぼつりと兄弟のことを打ち明け始め、その後ヴィクトールやペテールにもクラウスのことを話す。しかし、古くからリュカを知る二人はリュカに兄弟が居たことなど一度もないと言う。

リュカが架空のクラウスを生み出したとすれば、その過程は3章でクラウスの存在が語られる以前の1章と2章の中に見て取れるはずだ。まず自分に兄弟がいるという発想についてだが、1章でリュカが錯乱の合間に鏡をじっと見つめる描写がある。その時リュカは、自分の分身としての兄弟を鏡の向こうに見出したのではなかろうか。そしてその兄弟が国境を越えてしまったという話は、亡命を試みた父親から着想を得たと考えられる。名前については、リュカが祖父母の墓の前に佇む場面からであろう。その時見た祖父のファーストネーム Claus-Lucas（クラウス＝リュカ）の半分を、兄弟の名前としてクララに紹介したのではないだろうか。

そして、リュカはクララがトマについて語る度にクラウスへの妄執を強めて行く。それは、クララによってリュカの悲しい記憶が引き出されて行くようにも見えるが、クララによってそれが作られていくと読むこともできる。リュカはクララの痛みを理解したのでも、共感したのでもなく、吸収していたのではないかということだ。リュカは、クララが医者と愛人関係にあるのを知った時には激しく嫉妬し医者を排除したが、彼女の心の大半を占めているトマの亡霊に対しては不気味なほどなんの抵抗も示さなかった。死んだ人物が自分の愛する人の心を占めることは耐えがたい苦痛のはずだ。ヤスミーヌが、死後も実母としてマティアスの心を支配し続けた時には、リュカは激しく動揺した。マティアスが死んだ時、リュカの最初の一言が「ヤスミーヌだ。彼女にあの子を取り返された」（LP, 168）という呻きであったことは、マティアスの中のヤスミーヌが死して尚リュカを悩ませてきたことを物語っている。そういう

性格にも関わらず、クララのトマへの執着だけは何の抵抗も示さず耳を傾けたのは、トマの物語がクラウスを想像する上で必要不可欠のものであり、クララがある意味でクラウスの母胎となっていたからではないか。

リュカのクララとの関係はクララの失踪により唐突に終わりを迎える。

『ふたりの証拠』では、8章で突然登場するクラウスが何者かが謎である。一度はクラウスのことをリュカの妄想だと割り切った読者も、クラウス本人の登場によって攪乱させられる。8章でリュカと入れ替わりに登場するクラウスは、本当にリュカと血を分けた兄弟なのだろうか。それとも、リュカをよく知るペテルが「悪ふざけはやめよう、リュカ、お願いだよ (LP, 137)」と言った通り、クラウスのふりをして戻って来たリュカなのだろうか。マティアスの死亡から30年近くが経過し、クラウスと名乗るリュカにそっくりな男が町を訪れる。ペテルはリュカが失踪したこと、クララはそれと入れ違いに帰還しリュカを捜していたことをクラウスに伝える。ペテルがクララの食事を取りに台所に消えると、クラウスは言う。

「ほくだよ、クララ。」

「あなたなの？」

彼女はクラウスを見て、手を差し伸べる。クラウスは彼女の足元に膝まずき、その足を抱きしめ、膝の上に頭を乗せる。クララは彼の髪をそっと撫でつける。クラウスはクララの手を取り、頬に唇に押しあてる。渴いた手だ。痩せ細り、年齢によるしみに覆われている。(LP, 180)

この行動から、帰って来たクラウスは実はリュカなのだとは半ば証明できる。クラウスが単なる好奇心でリュカのような行動を取ったという可能性も否定できないが、そんな遊びのために足元に膝まずいて抱きかかえ、やせ細ったしみだらけの手を自分の唇に押し当てることができるだろうか。恐らくクラウスはクララに強い愛着を持つ人物、つまりリュカ

その人であり、彼はクララが自分を捜していたと聞いて、このような行為をしたのだ。しかし、クララは彼をトマだと勘違いして歓迎していただけだった。それが分かると、クラウスはクララの部屋を去る。

クラウスの名前 Claus (クラウス) は、Lucas (リュカ) とアナグラムである。これは、クラウスはリュカの並べ替えに過ぎないということ、つまり自作自演であるということを暗示しているのではないだろうか。

息子マティアス、あるいは兄弟クラウス

『ふたりの証拠』のもう一人の主人公ともいえるのがマティアスである。8章で構成される本小説のうち、2章から7章にマティアスは登場する。リュカは、マティアスを自分の息子のように可愛がり、血はつながっていないが自分の息子だ、とさえ公言する⁵⁾。しかし、リュカがマティアスに求めていた家族内の位置は本当に息子だったのだろうか。

リュカは一度、悪さをしたわけでもないマティアスを「悪魔の子」と呼んだ。マティアスが、リュカが幼少期に根城にしていた屋根裏部屋を見つけ、何度も侵入していたことを知った時のことだ。

「よくお聞き、マティアス。おまえは好きな時にここに登って来ていいよ。ぼくの部屋に入ってもいい。ぼくが居ない時もね。聖書も辞書も、もし読みたければ百科事典全巻だって読めばいい。でも、ノート、これだけはだめだ、悪魔の子。」

リュカは言い足す。

「おばあちゃんは、ぼくらのことをこんな風に『悪魔の子』って呼んでいたんだ。」(LP, 90)

リュカは、「ぼくら」が呼ばれたのと同じ方法でマティアスと呼んだ。そして、その日から自分が子供時代を過ごした屋根裏部屋と聖書と辞典をすべてマティアスに明け渡した。

また、リュカは自分と同じようにマティアスを学校に行かせないつもりだった。学校へ行くと主張したのはマティアスのほうである。マティアスの意思を尊重するリュカは、渋々学校に通わせ始める。

しかし、マティアスはその奇形の体と優れた頭脳の所為ですぐにいじめに遭う。それを見かねたリュカは、今度は自分が子供時代に使っていた剃刀と砂利の詰まった靴下をマティアスに与える。

「これはほくらが他の子供たちから身を守らなければならなかった時に使っていた武器だ。使いなさい。自分で身を守るんだ！(LP, 131)」

このように、リュカはマティアスに自分の子供時代の再現を要求している。リュカはマティアスに、去ってしまった自分の兄弟を求めているのだと言えるのではないだろうか。そのことを決定づける会話がある。

「兄弟がいなくなっちゃった時、どうだった？」

「彼なしでどう生きていけばいいか分からなかったよ」

「じゃあ今はわかるの？」

「うん。おまえがここに来てから分かるようになったんだ。」(LP, 89)

マティアスは間違いなく、クラウドの不在を埋めるべくリュカに求められているのである。

だが、マティアスはリュカの抱く理想とは正反対の方向へ成長する。リュカが止めるのもきかず学校へ行き、いじめに屈することも、暴力で仕返しすることもなく耐え続ける。リュカの差し出した武器も受け取らなかった。人を傷つけることで肉体的な傷よりもっと耐えがたい傷を負うというマティアスの考えは、暴力をひとつの有効な手段として躊躇なく行使できるリュカとの間にある内面性の違いを露呈させる。マティアスは、どんな苦難に直面しても決して歪まない精神と理性を持ち併せ

ているのだ。

『悪童日記』を読む限りでは、過酷な環境は双子を逞しく不敵な子供に成長させたように見えた。しかし、マティアスの歪みない精神との対比によって浮き彫りになるのは、その性格の異常性である。生き延びるために武器を使い人を傷つけることを学んだ『悪童日記』の日々は、マティアスを奇形にしたコルセットのように双子の理性を締め上げ、取り返しがつかないほどに変形させてしまったのだ。

リュカは、クララの浮気相手を攻撃する際にもこの幼稚な武器を使用している。この時点でリュカは20歳を過ぎていたにもかかわらず9歳の頃の武器に頼っているのだ。リュカがものを書くのに使っていた道具も子供の頃から変わらない。8章で、リュカが残した記録としてクラウスに渡されたのは「5冊の大きな学童用ノート (LP, 176)」であり、大人が使うようなノートは一冊も含まれていない。これは、リュカの精神の健全な成長がその年代で止まってしまったこと、9歳の頃から少しも成長できていないことを示してはいないだろうか。

リュカは、人々が彼の外見を美しいと言うのに反して自分自身をそう認識していない節がある。リュカは鏡をのぞき込むようなことはほとんどしないからだ。鏡を使わないで自分を見つめる場合、見えるのは内面の姿だけである。小さなマティアスの外見に自分と瓜二つの兄弟を投影するという事は、リュカが自分の内面とマティアスの外見を重ね合わせているということではないだろうか。つまり、リュカ自身も自分の内面を、成長せず小さいままの奇形だと考えていると言える。

「おばあちゃん」のお墓と掘り起こされた骸骨

「おばあちゃん」は、『悪童日記』の主要な登場人物であり、波乱に満ちた時代を双子と共に生きた重要な人物である。だが、それだけ大きな存在だったにもかかわらず、リュカは「おばあちゃん」を埋め合わせる人物を捜し求めている。その理由に関して説明できるのは、唯一、墓

の存在を通してだけである。

母親と妹は爆撃され、その骨は屋根裏部屋に今も隠されている。父親は身分証明を持たずに亡命を試みて命を落とし、リュカもその無謀な亡命者との関係性を否定したので死体は身元不明として処理され、リュカがその墓の場所を知ることはない。一方、「リュカは祖父母の墓の前で立ち止まる (LP, 11)」とある通り、「おばあちゃん」のお墓は存在することが分かる。墓があり埋葬されているということは、その死がリュカの中で整理され、存在が埋葬されていることを暗示する。それとは対照的に、掘り返されて屋根裏に吊るされている母親と妹の骨は、リュカの中でそれが未だ解決しない問題であることを示している。

最終章でのペテルの回想によると、リュカは母親と妹に対してそうしたように、2年後マティアスの骨を墓から掘り出して加工し、傍に置いていたという。当初母親と妹の2体だった骸骨は、マティアスの骨が加わって三体になった。これは、リュカがマティアスを家族だと見做していたこと、彼の存在を終わったこととして埋葬しきれなかったことを暗示している。

2. 家族の置き換えとその結末

家族の置き換えは可能だったか——マティアスの例——

結局のところリュカは家族を再構成できたかという点、その試みは失敗に終わった。そのことをリュカに突き付けたのがマティアスである。

リュカがマティアスを自分の双子の兄弟のように愛し、自分の息子のように大事に扱った。しかし、リュカがマティアスに「父親」として理解されることはなかった。

「孤児って親のいない子供のことだよ。ぼくも親がいなくなっちゃったよ。」

「いるじゃないか、お母さんのヤスミーヌが。」

「ヤスミーヌは行っちゃったよ。ねえ、お父さんは？ どこにいるの？」

「おまえのお父さんはぼくじゃないか。」

「でも、もうひとりのほうは？ ほんとうのほうは？」(LP, 123)

マティアスの言葉は、生まれて以来ずっと世話してきたリュカがマティアスと一度も会ったことのない実父に父親という一点において惨敗したことを紛れもなく示している。敗因はただ、血が繋がっていないということだけだ。

また、リュカはヤスミーヌにも敗北する。マティアスはヤスミーヌに対してあまり懐いていなかったが、それでもヤスミーヌが消えた時このように口にした。

「ここでリュカといっしょにいてもなんにもいいことない。ヤスミーヌといっしょならどこでもいいんだ。」

リュカは言う。

「都会には子供が楽しいものなんてないぞ。庭もないし動物もいないんだ。」

子供が言う。

「でも、お母さんがいる。」(LP, 86)

リュカは賢くお話上手で大工もでき、家と庭と畑と家畜を持っている。マティアスを養うのも喜ばせるのもいつも彼だった。あらゆる点に於いてリュカが果たした役割はヤスミーヌを圧倒しており、リュカ自身もそう自負していたからこそヤスミーヌを排除できたのである。リュカはヤスミーヌの不在がリュカとマティアスを家族に思ったのではないだろうか。ところが、ヤスミーヌを殺害した後になって、マティアスはリュカより母親と一緒に居る事の方が重要なのだと言う。この一件を

きっかけにして、家族の再構成という希望的主題に血縁という絶対的な制約が浮き彫りになり、リュカを苦しめる。

リュカがヤスミーンを殺してしまったばかりに、マティアスは自身を孤児だと認識し始め、露骨に孤児院を恐れ始める。リュカがどんなにマティアスを捨てたりしないと約束してもマティアスは安心できない。絶対に手放さないと約束していた実母に置き去りにされたと聞かされて、父親でもないリュカが、醜い自分をいつまでも世話するなど信じられるだろうか。更にある時、リュカが美しい少女（成長したアニエス）と彼女の弟サミュエルと一緒に居る所を見て、マティアスは彼らこそ本当の家族のようだと感じる。そして、同じような年齢でありながら自分と違ってリュカに相応しい外見を持つ少年、サミュエルの登場を切欠に、マティアスは追い詰められ、ついに自殺に至る。

「三人で台所に入って来るのを見て、本当の家族というのはどういうものか分かったんだよ。ブロンドの髪の毛のきれいな両親と、ブロンドの髪の毛のきれいな子ども。ぼくには家族がない。父さんも母さんもいないし、ブロンドじゃないし、醜くて、障害児なんだ」(LP, 166)

皮肉なことに、リュカとの家族関係に対する絶望がマティアスにとって致命的な問題だったということは、リュカと家族になることがマティアスの唯一の希望だったということを示している。マティアスもまた、リュカと家族になりたかったのだ。

マティアスがその希望を自ら断ちきったことによって、リュカの希望もまた絶ち切られた。リュカは永久に血縁の両親に打ち勝つ機会を失ったのだ。マティアスの死は、リュカにとって血縁に対する永遠の敗北という意味も持っているのだ。

マティアスに関する一連の悲劇は、リュカの家族の再構成という試みに対するある種の回答である。人間にとって足し引きや置き換えでは補

えない絶対的なものの存在を、そしてその絶対的なものの喪失がいかに永久的であるかを浮き彫りにしたのだ。

旧い家族と新しい家族

ならば、一度家族を失った人間は孤独に生きるしかないというのか？ 永遠の喪失という救いようのない孤独を描くこの物語は、一方でそれ以外の可能性もリュカに示していた。

リュカには、ペテールという歳の離れた友達がいた。リュカとマティアスが過ごした家を維持する約束を20年間地道に守り続けてくれた良き友人だ。隣人の不眠症の男はリュカの目の届かない時間帯にもマティアスを見守り、彼の発する無言のサインを伝えてくれた。リュカは友人に恵まれていたと言っていいのだ。ただの同居人だと切り捨てたヤスミーヌは、不安定になったリュカに気付いて心配し、いつも夜を徹して待っていた。リュカさえ望めば、良き妻になっただろう。成長したアニエスも、リュカに恋して誘惑したが、リュカは彼女にもまるっきり興味をしめさなかった。なぜアニエスと恋愛しないのかとマティアスに訊かれて、リュカは誰とも結婚したくないからだと答える⁶⁾。

これだけ人に恵まれていながら、リュカは新しい人間関係に価値を見出さなかった。結婚したくないという言葉は、自分が夫や父親という新しい立場になる事に対する拒絶であり、新しい家族関係を拒否する意思の表れである。リュカが追い求めたのは、自分を中心にして父や母のいる過去の形の家族ただ一つなのだ。9歳の頃の武器を成人しても使い続けていたことは、子供の頃の家族をずっと求め続けていたことを暗示している。リュカは家族を求める試みに失敗したのではなく、初めから見つかるはずのない家族を捜していたに過ぎないのだ。

『ふたりの証拠』では、旧い家族に関して特に描写されていない。だが生前の姿が語られることはなくとも、母親と妹は骸骨として登場し、父親の辞書、「おばあちゃん」の家、クラウド＝リュカという「おじい

ちゃん」の名前は、無言でその姿を示すことによってリュカを捉え続けている。新しい家族関係に関心を示さず、盲目的に父親と母親と兄弟の居る家庭を渴望したことは、それ自身がリュカが記憶の中の家族に支配されていることを示している。

身分証明書としての家族

本作はリュカの視点から7章までが記され、最終章である8章は年老いて帰国したクラウスの視点から書かれる。クラウスは、我々が今まで検証してきたところの7章分の手記をペテールから受け取ると微笑みを浮かべて言う。「やっと見つけた、これこそリュカが実在した証拠だ(LP, 176)」。

ところが8章が結ばれたあと、末尾に添付された一通の調書が、この手記全体の信憑性を失墜させる。外国からビザで入国したクラウスが、期限を過ぎて違法に滞在していたところを拘束され、それに伴って当局がクラウスの身辺調査をした記録だ。これによると、町にはリュカなる人物もクラウスなる人物も存在した記録はない。役所でリュカに身分証を発行し、それ以来彼の良き友人として交流していたはずのペテールの存在も見受けられず、8章でクラウスとペテールが出会った書店は、調書によると女店主が切り盛りしているらしい。原稿についても、7章までをリュカが書いてペテールに預け、20年後にそれを受け取ったクラウスが8章を書いたのだとクラウスは主張するが、筆跡は同一で紙は新しく、クラウスが滞在中に一気に書き上げたようにしか見えないという。この調書は、『ふたりの証拠』及び『悪童日記』の解釈にどのような影響を及ぼすのだろうか。

『悪童日記』と『ふたりの証拠』は、主人公に兄弟が居たか否かという点で矛盾する。真実のみで構成されているはずの『悪童日記』は、「リュカの実在の証拠」であるところの『ふたりの証拠』によって否定されるのだ。その上『ふたりの証拠』自体も、巻末の調書によってその

信憑性を否定されている。この矛盾のために、彼らが生きた唯一の痕跡とも言えるこの二冊の手記は完全に証拠能力を喪失する。その上、信頼に足る客観的な書物であるはずの調書でさえも根拠としては頼りない。クラウスの祖母と思われる婦人だけは登録台帳に Maria Z (マリア・Z) という名前で記録が残っており、「戦争の間、一人または二人以上の子供がこの婦人の元に預けられていたかも知れない (LP, 187)」と書かれているのだ。双子の实在の証拠がないことは、双子が实在しなかった証拠にはならないことを、この調書は自ら指摘している。

『ふたりの証拠』で、リュカがペテールに初めて身分証明書を発行してもらった描写がある。ペテールはリュカと相談しながら都合の良いように用紙に記入していく。その発行手順にもかなりの問題があるが、何より注目すべきはリュカは15歳まで自分を証明する如何なる書類も持たずに生きて来たことだ。この事からも分かる通り、戦争を含めた政治的混乱によって社会は明らかに機能不全に陥っており、書類がないことは存在しないことの証明にはならず、書類に書かれたことが必ず真実だとも言い難い状況が続いていたのだ。この二作品及び一通の調書は、相互に矛盾し合い、相互の証拠としての価値を否定し合っている。

あらゆる書類が自己の同一性を証拠付け得なかった時、最後の希望となるのが家族である。家族は血縁によって保障された、第一義的な社会組織なのである。役所が書き漏らしても、家族だけは自分の实在を反射する絶対的な鏡であり、どんな書類よりも確実な身分証明の手段なのだ。つまり、家族をめぐる物語は、自己同一性をめぐる物語でもあるのだ。

結論

『悪童日記』において、過酷な現実は全て優しい母親と対比を成している。直面する出来事の残酷さに反比例するように母親が理想化され、本人の再来によってそれが破壊されるのだ。『ふたりの証拠』で、リュ

カは失った家族の再構成を試みている。リュカが年齢相応の物を持たず、9歳の頃の武器やノートを変わず使い続けていることは、彼が両親と兄弟から構成される9歳の頃の家族に囚われていることを暗示する。一作目と二作目と調書の間にある内容の相互矛盾は、あらゆる papier (紙・書類) の証拠能力の弱さを暴き、家族という生身の裏付けが個を定義づける上でいかに切実な問題であるかを物語る。

家族が死に絶えてしまった前二作品を覆して一から語り直される『第三の嘘』で、主人公は家族と再会を果たす。亡命によって社会的な断絶を経験し、年齢も名前も偽った主人公は、家族と再会することによって同一性を取り戻すことができるのだろうか。一作目、二作目の嘘がどのように反映されているか、そしてそれがどのように帰結するかについては、稿を改めて論じることとしたい。

注

- 1) 本稿では三部作の底本に下記の作品を使用する。なお、日本語訳はそれぞれ堀茂樹氏の邦訳を参考にしうえでの拙訳である。以下作品名、参考日本語訳、および本稿で使用する略号を列挙する。
一作目：Agota Kristof, *Le Grand Cahier*, Paris, Seuil, 1986 (『悪童日記』、堀茂樹訳、東京、早川書房、1991年)、以後GCと略す。原題を直訳すると『大きなノート』となるが、日本では既に『悪童日記』として知られているため、題名は堀茂樹氏の翻訳をそのまま使用して『悪童日記』とする。
二作目：Agota Kristof, *La Preuve*, Paris, Seuil, 1988 (『ふたりの証拠』、堀茂樹訳、東京、早川書房、1991年)、以後LPと略す。原題を直訳すると『証拠』となるが、これについても堀茂樹氏の翻訳が浸透しているため、それに倣うこととする。
三作目：Agota Kristof, *Le Troisième Mensonge*, Paris, Seuil, 1991 (『第三の嘘』、堀茂樹訳、東京、早川書房、1992年)、以後TMと略す。
尚、本稿では三部作の引用に関して、各作品を示す略語に原文のページ数を添える形で記載する。
- 2) 「可であるか不可であるかを判定するにあたって、ぼくらはとても単純なルールを設けている。作文の内容は事実でなければいけないことだ。ぼくらはあるがままに、何を見たか、何を聞いたか、何をしたかを

描写するのだ。」、GC, p. 33.

- 3) 「おばあちゃん」は、「おかあさん」の子供がふたりだと知ると、他の子供はどうしたのかと言う。犬は一度に4、5匹は子供を産むのだから、「おかあさん」もそのくらい生んでいるのだらうと言うのである。「牝犬ってのは、四、五匹くらい一度に産むもんだよ」、GC, p. 10.
- 4) 東浦弘樹、「母は死すべし、父は死すべし：アゴタ・クリストフの『悪童日記』」、『人文論究』、第57巻、第1号、関西学院大学人文学会、2007年、87-104頁。
- 5) 「はくの子供ではありません。でも、今ではすっかりはくの子です。」、LP, p. 67.
- 6) 「はくは誰とも結婚したくないんだ」、LP, p. 162.

La Trilogie d'Agota Kristof – Réflexion sur un portrait de famille –

TAKAHASHI, Natsuki

La Trilogie des jumeaux d'Agota Kristof (1935-2011) a pour sujet la chronique de deux jumeaux, elle est constituée de trois romans : *Le grand Cahier* (1986), *La Preuve* (1988) et *Le troisième Mensonge* (1991). Notre étude de *La Trilogie* portera sur le portrait de famille. C'est l'histoire de deux jumeaux exilés pour des raisons politiques, cependant le sujet ne porte pas sur cet exil, mais sur la famille. Dans ces trois romans, les protagonistes écrivent sur leur famille : tantôt à partir de leurs souvenirs de famille, tantôt à partir de leur observation des relations avec leur mère, ou alors à partir de leur réflexion sur l'amour intime ou familial. Les jumeaux recherchent aussi chez les autres une expression de la maternité ou de la paternité. On va voir surtout *Le Grand Cahier* et *La Preuve* parce que structurellement, le troisième est beaucoup différent du premier et du deuxième.

La première partie est consacré à l'analyse du *Grand Cahier*. Premièrement, nous verrons comment la famille est décrite, surtout la mère. Après la séparation de la mère et des jumeaux, celle-ci devient un beau souvenir dans la tête des jumeaux bien qu'ils essayent d'écrire de manière objective. Ils ne disent pas leurs émotions, mais on peut noter qu'ils n'écrivent que de belles histoires sur leur mère. Leur père dans leurs souvenirs est toujours méchant et cela vient renforcer la tendresse pour la mère. Leur grand-mère aussi est décrite de manière négative : elle est laide, sale avec une forte haine, à l'opposé de la mère gentille, douce, propre et aimante. Pourtant, après leurs retrouvailles avec leur mère, les deux jumeaux la trouvent éloignée de ce qu'ils avaient imaginé. Ils s'aperçoivent qu'ils avaient fait de leur mère une mère idéale dans leurs souvenirs, c'est aussi ce que montre la lecture de cette première partie.

Dans la deuxième partie, nous analysons *La Preuve* sur le même thème : la famille. Un des jumeaux, Lucas, a perdu sa famille pendant la guerre, il est séparé de son frère qui s'est exilé et ne parvient plus à trouver quelqu'un avec

qui il aurait un lien de parenté. Après la mort de son père, Lucas commence à appeler Monsieur le curé « mon père », il devient l'amant d'une femme qui ressemble à sa mère et essaie d'élever un enfant comme son frère. C'est-à-dire qu'il essaie de reconstruire sa famille perdue, mais cette famille ne fonctionne pas : les uns meurent et les autres quittent la ville. Quand son frère exilé revient dans sa ville, il ne parvient pas à le revoir. Cette histoire raconte l'exil de la famille.

(人文科学研究科フランス文学専攻 博士前期課程2年)

